漢字はホントは面白い　Ⅱ

「手」のつく漢字

杉　本　　浩

昨年に続く第２弾です。今回は、漢字の構成要素として大変よく使われる「手」について書きます。

皆さん、「手」のつく漢字と言えばどんなものを思い浮かべますか？常用漢字でいえば、掌・挙・摩・撃・拳がありますね。ちょっと斜めになった「看」や、形が変わった「承」も、手の形を構成要素としています。

手偏（へん）の字はたくさんありますね。その中で、なぜか「拝」だけ、旧字体が「拜」で、偏が手の形になっています。でも、ほかの字の偏も、昔はもっと手の形に近い字体でした。

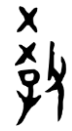
では、「手」が使われている漢字は、「手」の形のものと手偏のもの、それだけでしょうか。

漢字を作るにあたっては、「手」そのものや山・川などは単純な象形文字でよいのですが、ちょっと複雑なものや「～している様子」を表したいときは、いろいろな構成要素を集めて「ポンチ絵」のように表現することがよくありました。

手は、人の動作を表すうえで大変重要な部位ですので、漢字のなかにはいろいろ形を変えて登場しています。ただ、現代では、元は手だったと気付かない形になってしまったものが多いのです。

祭　金文

獲　小篆


教　甲骨文

右　金文

左　金文

例えば「又」。左図の「祭」という字の右側にある３本指のフォークのようなものが、省略された手の形です。これが楷書では又になります。祭という字は、お供えの台（示）の上に、手（又）で捧げものの肉（「にくづき」の斜めになったもの）を載せ、神様のお祭りをする様子を表した字です。

また「獲」という字の右下部分は、下方から手で鳥（隹）を捕まえる様子を表しています。ほかに、穫・賢・護・侵・腎・曼などの字に含まれる又も、元は手の形です。

「攵」（のぶん）・「攴」（ぼくにょう）・「殳」（ほこづくり）といった部首に含まれる又も手で、これらの部首は手に棒や武器を持って、隣にあるものをたたく（殴る？）ことを表します。「教」は、学校にいる子どもを、棒か鞭を持った教師が見張っている（たたいている？）ところです。スパルタ教育だったようですね。

次に、楷書で「ナ」のような形になっているものもあります。左図の「右」と「左」は、本人から見た右手と左手の形です。口と工は、まじないの道具と言われています。

「又」と「ナ」を組み合わせたのが「友」です。甲骨文で見ると、同じ形の右手が２つ並んでいます。これは二人で力を合わせて何かをしているところで、友という字は古くは同族や同僚といった協力関係にある人を意味しました。

友　甲骨文

「有」も手と肉からできています。

次は第１回にも登場した「⺕」。横から出ている手で、建・書・急・事・隠・穏・君・伊・尋・妻など多くの字で使われています。「筆」の元になった「聿（イツ）」という字の甲骨文を見れば、手で筆を持っている様子であることは一目瞭然です。「尹（イン）」は杖を手に持っている聖職者です。現代の字では「ヨ」のように、横に突き抜けていない形のものもありますが、旧字体ではすべて「⺕」の形でした。

聿　甲骨文

ただし、帰・婦・侵・浸のヨは「帚（ソウ：ほうき）」の一部、「虐」の下部は虎の爪と言われています。

帚　甲骨文

次に、上から手が出てくると「爪」です。部首となる場合は「⺤（つめかんむり）」となります。現代の字では「⺤」という形ですね。

左図の「受」という字は、左上の⺤と、右下の又で、中央のもの（お盆？）を受け渡している様子です。

受　金文

「為」は旧字体では「爲」で、工事などのために、手を使って象を使役している様子だと言われます。殷の時代の気候は温暖で、揚子江の北側にも野生の象がいたそうです。

為　甲骨文

「争（旧字は爭）」は、上の⺤と下の⺕で、杖のようなものを奪い合っている様子と言われますが、甲骨文では何かＵ字型のものが記されており、これが何かはよくわかりません。

争　甲骨文

「寸」という字も元は手です。又に比べると指が１本多いですね。寸はもちろん寸法の単位ですが、古代の１寸は一本の指の幅、約２cmと、今よりかなり短かったそうです。

寸が構成要素となる場合は、普通に手のことを意味するものが多いようです。

寸　小篆

「導」は手に異民族の首を持って道を歩く図。城壁の外の道は、悪霊や妖怪がうようよしていて、首の呪力を借りて祓い清めないと安全に通れないと考えられていたといいます。

「尋」は、上と下に手、中に工と口がありますね。そうです、この字は「右」「左」２文字分の部品を集めてできているのです。まじないの道具を両手に持って、右往左往しながら、神のありかを探し求めている様子と言われています。

尋　小篆

そのほか、手の意味の寸を含んでいる字には、尊・対・耐・寺・得・将・専・博・付・封などがあります。

興　小篆

興　甲骨文

挙　小篆

開　古文

奉　小篆

送　金文

ここからは両手を一度に表した構成要素です。

両側から内側に向けて手が出てきている形が「興」などの上部です。さらにこの字の場合、下部も下から両手が出てきている様子です。小篆を見ればこのことが分かりやすく表されていますが、さらに古い甲骨文を見れば、4本の手でおみこしのようなもの（酒器と言われています）を持ち上げている様子であることが分かります。

「挙」の旧字体は「擧」ですから、この字は4本の手にさらに手の形の部品も加え、多くの手でものを高く「挙げる」ことを強調しています。

下からの両手の例としては、「開」（門の閂（かんぬき）を両手ではずす）や「戒」（両手で戈（ほこ）を持って警戒している）、共・具・算・其・棄・兵・暴などもあります。

さらに、「奉」は木の枝を両手で神に捧げている様子で、奏・泰・秦も同様に両手が使われています（「春」は別の成り立ちですが）。

また、「送」のしんにょう以外の部分は「奉」の上部と同様で、何かを捧げて進呈している形ですが、しんにょうを使うことにより、遠く離れたところへ贈り物を届ける、というニュアンスを表しているようです。

いろんな漢字の中で、「手」が大活躍していることがお分かりいただけたと思います。やっぱり漢字は面白い！　そう思いませんか。

◎用語解説

・**甲骨文**　現存する最古の漢字。殷代後期（約3300年前）に登場。占いの内容や結果を亀の甲羅や獣骨に彫り込んだもの。

・**金文**　青銅器の銘文として鋳込まれた文字。殷代末期（約3100年前）に登場し、周代に盛んになった。

・**小篆**　秦の始皇帝が定めた統一書体。約2200年前。

・**古文**　後漢の時代に小篆より古いとされていた字体。

参考文献：「新訂字統」　普及版第5刷　白川静著、平凡社　2011年

（文中の古代文字は、台湾・中央研究院のウェブサイト「漢字古今字資料庫」から転載しました）

＊私のホームページもご覧ください！

漢字教育士ひろりんの書斎　検索